

特別寄稿

医学生が考える理想的な医師の未来像

1) 青森厚生病院外科, 2) 聖路加国際病院乳腺外科, 3) 弘前大学消化器外科

赤坂 治枝¹⁾, 山内 英子²⁾, 袴田 健一³⁾

内容要旨

弘前大学医学部医学科3年生に対し、医師の労働環境に関するワークショップを行い、労働環境の問題点、その解決策について討論した結果を報告する。多くの学生が、長時間労働とそれに伴いワークライフバランスが保てないことが問題点であり、現在の労働環境は自分たちが働くことができる環境ではないと考えていた。若者の意見とこれまでの医師の働き方は明らかに異なり、若者の意見が反映されない労働環境改善は真の改善に繋がらない可能性が考えられた。良い医師になろうとする若者のモチベーションを低下させないために、医師の働き方改革には若者の意見も取り入れ議論することが必要である。

キーワード 医師, 労働環境, 若手

I. はじめに

医師の長時間時間外労働の問題を含めて、労働環境に関わる様々な課題がクローズアップされている¹⁾。2016年10月、厚生労働省も「新たな医療の在り方を踏まえた医師・看護師等の働き方ビジョン検討会」を立ち上げ、医療従事者の働き方について議論が重ねられた。報告書には、労働環境改善へ向けた多くの提言と共に、これから医療現場の担い手となる若い世代に対しても情報発信を積極的に行うべきとの意見が含まれている²⁾。

しかしながら、現在の医学生や若手医師に労働環境に関する問題提起や意見陳述の場はほとんどなく、医学生自身も自らの意見が将来の働き方に影響するとの認識を持っているとは言い難い。労働環境改善にはこれから医師として働く若者の意見が反映される必要がある。

今回、医学部3年次学生を対象に、医師の労働環境に関するワークショップを2期にわたって行い、若者が考える問題点やその解決策など貴重な意見を得ることができたので報告する。

II. 方法

平成28年度、平成29年度弘前大学医学部医学科3年生（各年度ともに男性86名、女性44名）に対し、山内英子医師（聖路加国際病院副院長兼プレストセンター長）による医師の労働環境に関わる問題点の講義の後、平成28年度は「医師のワークライフバランスを保つために」、平成29年度は「10年後に理想の働き方を実現するために」をテーマに、1グループ約10人でKJ法を用いてワークショップを行った（図1a）。KJ法とは、文化人類学の分野で考案された研究方法で、もともとは異質

MEDICAL STUDENTS' PROSPECTIVE VIEW OF THE PHYSICIAN'S IDEAL LIFE STYLE

Harue Akasaka¹, Hideko Yamauchi² and Kenichi Hakamada³

Department Surgery of Aomori Kousei Hospital, Aomori, Japan¹, Department of Breast Surgical Oncology of St Luke's International Hospital, Tokyo, Japan², Department of Gastroenterological Surgery of Hirosaki University School of Medicine, Hirosaki, Japan³



図1 討論・発表風景

なデータを整理、分類、保存する方法として考案されたものである。「混沌の中から秩序を作り出す技術体系」として多くの分野で注目され、現在は医学や看護の分野でも質的データの分析方法として利用されている³⁾⁴⁾。データ分析は名刺程度の大きさのカードに転記したデータをグループ分けし、グループごとの関係を図解化した上で、それを文章化し解釈を行うものである⁴⁾。具体的には、①各グループでテーマに対する問題点を一人2～3項目ずつカードに記載する(図1b)、②意味の類似するカードをそれぞれ集め、問題群を作成し、問題群を簡潔に表現するタイトルを設定する、③X軸が重要性、Y軸が実現性のXY図上に、重要性和実現性を踏まえて問題群を二次元展開し配置する(図1c)、④最も重要性和実現性が高い問題群のタイトルについて、解決策を列挙し、発表、質疑応答を行う、の順序で行った。

III. 結果

各グループが問題点として挙げた項目とその解決策についての要約を表1、表2に示す。

平成28年度「医師がワークライフバランスを保つために」については12グループでディスカッ

ションが行われた。最も多くのグループが問題点としたのは「長時間勤務」であり、ついで「医師不足」、「家庭との両立が困難」、「医療に対する社会の理解不足」であった(表1)。

「長時間勤務」に対する改善案としては、シフト制、フレックスタイム制の導入による労働時間の明確化、当直回数の制限による労働時間の短縮、また確実な休日の確保、特定看護師や医療事務の増員による業務の軽減、患者情報の電子化を整備し地域全体で患者情報を共有、かかりつけ医での対応や特殊な分野の遠隔医療を可能にすることや、AIの導入で文書作成などを軽減する、などの意見が挙げられた。

「医師不足」に対しては、医学部定員の増加、地域枠の正しい活用で地域の偏在を解消すること、科の偏在を解消するために診療科の選択を何らかの規則で割り振る仕組みが挙げられた。また女性医師の離職防止、休職した医師の復帰支援の取り組みの必要性が挙げられた。さらに、急性期病院への患者集中を解消するため、かかりつけ医との連携や総合医の充実・活用も挙げられた。

「家庭との両立」については、保育所の確保、時短勤務などの制度の他に、男性の家事参加や職場環境の意識改革といった点が挙げられた。

表1 医師がワークライフバランスを保つために

問題点	グループ数	解決案	具体策
1 長時間勤務	6	シフト制, フレックスタイム制 休日の確保 当直回数制限 仕事の分散 IT技術導入による効率化	特定看護師や医療事務の増員 電子化による遠隔医療, AIによる診療補助
2 医師不足	3	医師数増加 機能分担	医学部定員の増加 女性医師の復帰支援 地域枠の正しい活用 地域・科の偏在解消 離職防止のための取り組み 外国人医師の受け入れ かかりつけ医, 総合医の充実・活用
3 家庭との両立困難	2	子育て支援, 保育所確保 男性の家事・育児参加 職場環境の意識改革	時短勤務, 育児休暇の充実
4 社会の理解が不十分であること	1	社会全体の医療に対する認識改善 患者減少の取り組み	予防医学の充実

「社会の理解不足」については、特に不適切な時間外受診を減少するために、夜間や救急外来の受診についての認識の改善、また予防医学の普及による疾病発症の減少が挙げられた。

次いで、平成29年度は「10年後に理想の働き方を実現するために」とのテーマを巡って13グループでディスカッションが行われた。最も多くのグループが問題点としたのは「ワークライフバランスが保てないこと」であり、ついで「不適正な労働時間」、「医師不足」、「社会の理解不足」、「行政の整備不足」であった(表2)。

出された意見やそれに対する改善策は平成28年度と重複する部分が多かったが、新たな意見としては、「ワークライフバランスが保てないこと」に対して若手医師の格差のない教育システムで一人前の医師を早く育てる仕組み、また休暇を取得しやすい現場の環境作りが挙げられた。「社会の理解不足」については医療機関の利用に関する患者教育、メディアによる啓蒙、医療費やシステムの見直しにより適正受診を促す試みが挙げられた。「行政の整備不足」については、行政主導での地域の医師数の調整を行うことや、女性の社会進出のための支援強化、男女平等の育児休暇取得のための取り組みが意見として述べられた。

IV. 考察

2015年の消化器外科医の労働状況に関するアンケート解析⁵⁾によると、一週間の平均労働時間は68.3時間、労働基準法で定められた一週間の最長労働時間55時間を超える医師は74.5%に上り、このような労働時間を短縮したいと考えている消化器外科医は約72%に上るとされている。また、週55時間以上の労働をしている医師の割合は、30歳未満が94.5%と最も高く、年齢と共にその割合は減少しており、特に若手による長時間労働の実態、あるいはその必要性が明らかとなっている。

一方で、勤務時間短縮のために交代制勤務の導入を希望する消化器外科医は必ずしも多くはない。患者側が常に主治医の対応を希望し、医師の側も治療を担当した患者に対していつでも責任を持って対応したい、あるいはすべきと考えている医師患者関係の現状を反映しているものと考えられる。

しかしながら、このような勤務状況に対する医学生の多数意見は「今の医師の働き方は自分が働ける環境ではない」との明確な現状否定であった。より長く患者の側で治療にあたり、自己研鑽に励むことが当然とされてきた従前の価値観に対して

表2 10年後の理想の働き方を実現するために

問題点	グループ数	解決案	具体策	
1 ワークライフバランスが保てない	7	医師数の増加	医師の偏在解消 医師の復帰支援 若手医師の早期育成	地域枠の活用, 科の選択方の在り方の再考 復帰セミナー 地域, 病院間格差のない教育
		業務の分担	特定看護師 医療の機械化 患者データの共有 AI活用 事務作業の軽減 地域と中核病院の連携	
		予防医学の推進		
		育児支援	院内保育園, 育児支援制度の活用	
		休暇を取得しやすい環境		
2 長時間労働	3	シフト制, ワークシェアの導入		
3 医師不足	1	医師数の増加		
4 社会の理解が不十分であること	1	患者教育 メディアの適正報道 医療費の見直し		
5 行政の整備不足	1	地域における医師数の調整 女性の社会進出支援 男女平等の育児支援制度の利用		

肯定的な意見がある一方で、一人前の医師となるために必要な側面ではあることは理解できるものの、このような勤務状況に適応できる人は例外的な人であるとの意見も聞かれた。医学生が考える現在の労働環境の問題は、①業務や仕事に費やす時間の多さ、②ライフワークバランスを保つことが困難、という点に集中していた。

では、医学生はどのような勤務環境を望んでいるのであろうか。最も多い意見は、勤務時間とプライベートを明確に区別できる勤務環境であり、シフト制やフレックスタイム制の導入による労働時間の短縮と明確化であった。これは先に提示した、交代制勤務を希望する消化器外科医は必ずしも多くはないとのアンケート調査結果とは相反する考え方である。

以上の結果は、われわれは労働環境改善に関す

る議論を行う上で、これまでの医師の働き方に対する価値観と、若者が考える価値観には違いが大きいということを認識する必要性を示している。もちろん、若者の理想の働き方は全て可能なものではなく、一方ですでに導入が検討されているものもあり、労働環境は改善に向かおうとしているところである。しかし、改善されはじめているからこそ、この問題のステークホルダーである若者の価値観を理解し、意見を取り入れた労働環境の整備を行わなければ、真の労働環境改善にならないのではないかと考えられる。

多くの医学生は、患者のため、社会のために自己研鑽を積んで一人前になるという高いモチベーションを持っている。彼らが引き続き医師として、そして外科医として充実して第一線で活躍しつづけるために、労働環境改善に向けた彼らの意見に耳を傾

けることは、結局のところ全ての医師にとって望ましい労働環境の構築に繋がると考えられる。

ただし、今回得られた意見は地方大学の2学年の医学生から得られたごく限定的なものである。今後広く医学生や研修医、若手医師の意見を得て、本来の若者の意見として集約されなければならないと考えている。

最後に、今回医学生から2期にわたって、医師の労働環境についての意見が得られたことは大変貴重なことであった。このような貴重な意見を提示してくれた平成28年度、平成29年度の弘前大学医学部医学科3年生全員に深く感謝致します。

文 献

- 1) 馬場秀夫：外科医と労働時間—働き方改革は可能か？—。日外会誌, 118(3)：259, 2017.
- 2) 第15回 新たな医療の在り方を踏まえた医師・看護師等の働き方ビジョン検討会, <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000164327.html>
- 3) 川喜田喜美子：KJ法の思想 川喜田次郎と歩んだ半世紀, 看教, 47(1)：12-17, 2006.
- 4) 田中博晃：KJ法入門：質的データ分析法としてKJ法を行う前に, 外国語メディア教育学会関西支部 メソドロロジー研究部会2010年度報告論集, 17-29, 2010.
- 5) 味見徹夫, 赤澤宏平, 葉梨智子, 他：消化器外科医の労働環境について—アンケート解析—. 日消外誌, 48(3)：282-290, 2015.

利益相反：なし

MEDICAL STUDENTS' PROSPECTIVE VIEW OF THE PHYSICIAN'S IDEAL LIFE STYLE

Harue Akasaka¹, Hideko Yamauchi² and Kenichi Hakamada³

Department Surgery of Aomori Kousei Hospital, Aomori, Japan¹, Department of Breast Surgical Oncology of St Luke's International Hospital, Tokyo, Japan², Department of Gastroenterological Surgery of Hirosaki University School of Medicine, Hirosaki, Japan³

Third-grade medical students of Hirosaki graduate school of medicine discussed the problems of doctors' working environment and possible solutions. Many students regarded long-time working hours and a lack of work-life balance as the most important issues. They also stated that they find it difficult to work in the current environment. Furthermore, they hoped for an environment, which clearly separates work from private life. Several differing values existed between young people's opinions and the current working style of doctors. It may be meaningless to improve the working environment without reflecting on young people's opinions. Discussion about doctors' working environment should consider young people's opinions, which would help young people become good doctors.